



詩法

言重愈くは清穉を欣ばる
 此はたう回を余り 天保に傳
 口迷或つもの子に於てはにも
 うい...らも 深る子たうは因湯
 を除けりい底を深の程深く
 女も感ら佩り
 生て介の知倍大そや世自ら期ある
 ぶももろしううて了富の強肥
 小居の勉子より人位に
 ちちまよの確行もは健し
 竹は倍し 直執可ある
 孫育と務み 志思に對し
 幸らんるを期し 中一り
 茲に會則表表と共に短管
 を併め衷心より 感の
 微音を 表しり

詩平

十三日

竹の野田

平島老白

玉の野田

平川野田

